

第3回シンポジウム—1

趣旨と概要

水野善文

我々に与えられたテーマは「『インド的文明』とは何か？」で、これを2回のシンポジウムで扱うことになっていた。第2回のほうで通時的なダイナミズムを問うという視点が設定されたので、第3回では共時性を加味し、広く横の関係からインドを探ってみることにした。とは言え、時代は古代から中世後期にまでおよぶし、インターディシプリナリーであることという要請にもとことん拘ることにした。

すなわち、より広範なユーラシア世界を視座として据え、古代から中世までの、インドとインドから見た西方ならびに東方との接触・交流・融合という契機を、美術史、科学史、言語・文学・思想・宗教などの分野において注視してみることにした。

我々が自明のごとく捉えがちなインドという枠組みだって決して画一的なものではなかったのだから、それを一度取り外して見て、ユーラシア大陸のまっさらな白地図のうえで、どのあたりにどのような色の濃淡が浮かび上がってくるのか探ろうとするものである。恐らく、美術史、科学史、思想史等のそれぞれの地図上には、おのおの全く違った色彩・濃淡の配置が現われでることだろう。そして、それらの地図を重ねあわせたときに、南アジアのあたりで、色んな色が交じり合って濃い黒色になってしまうところに、インド的と呼びうる個性が潜んでいるのではないだろうか。

「インド的」というテーマの設定に、安易な本質論に陥ってしまうのではなかと懸念を抱かれた向きもあるかもしれない。誰がどこから見ても多様性を認めることを禁じえないインドが単純な構造のなかに収まりきるものとは、端からおもえない。だが、顕在している諸相の下にあってそれを裏打ちする潜在的諸観念が、顕在相とは異なるネットワークを

張り巡らしている可能性もあるとしたら、それを探る方途は、様々な顕在相を丹念に探って、肉視できない地下の水脈の様を地上に描いてみるしかない。観念のレベルにおいても、幾層ものネットワークが重なり合っ
て縦横に張り巡らされているだろうから、解明は甚だ困難だとおもわれるが、それに敢えて挑んだのが今回の試みなのである。

・発題者・テーマ（質疑含む各 40 分）

田辺勝美（美術史）

インド人仏教徒は何故、仏像を創造しなかったのか？

矢野道雄（科学史）

科学史からみたインド文化

青山亨（インドネシア文化論・古代史）

ベンガル湾を渡ったインド的文明—東南アジアからの視点—

榊和良（インド・イスラーム思想史）

内なる「インド的文明」とイスラーム

・コメント（各 10 分）

横地優子（文学）

北田信（言語学）

田辺報告では、美術史の立場から、クシャーナ朝（1世紀半ば～3世紀前半）にヘレニズム・ローマ文化の影響のもとで開始される仏像製作の前史を、ダルマ文献でも強調されるところの道徳的観念である「布施」をインド・アーリヤンの特性のひとつと捉えて述べ、いわば多彩に色づけされる以前の、単色な状況を示してくれている。

科学史の視点からの矢野報告では、医学ではその土着性、天文学・占星術ではその外来性がまず指摘されるが、サンスクリット世界でなされた諸科学の体系化がまた西洋に注目されるという、科学知識を巡っての、まさに東西間のダイナミズムが鮮明にされている。

青山報告では、今日の東南アジア地域の「インド化」に問題が設定され議論されるが、そこでは両地域がベンガル湾という大海を介しながらも境界なく連なっていたことをリアルに描いてくれている。東南アジアで使用されることになる文字や借用語彙を例として示しながら、政治権

力による上からの高圧的強制的な変容ではなく、むしろ下を草の根のようにジワジワと浸透していくインド的英知の様子が語られている。

中世期のユーラシア全域におよぶ大きなうねり、イスラームを扱ったのが榊報告である。西方からインドの文化・思想をどのように見、アラビア語やペルシア語でどのように描き、また翻訳紹介されたかが具体的にわかる。そしてムガル期(16～18世紀)、インド世界自体がペルシア語で覆いくるめられ、ペルシア語がサンスクリットに取って代わってリングアフランカの地位をえたが、同時にそれとの葛藤の中で各地の地方語による述作も芽生え育まれていくことが示唆される。

さて、このように様々なジャンルにわたっていろいろな色彩で色づけされたユーラシア大陸の地図を重ね合わせてみよう。南アジアの近辺で濃い黒色を呈しているところに何がみつかるだろうか。その最も基層まで搔い潜てみると、そこに見出されるものは「言語」である。

無形な英知・文化が具象化され顕在相を帯びるのは、言語のなす業であり、必然、言語・テキストの残存するところを中心に文化を見ることになる。当然、人間の居住する全空間が文化の場であるはずだが、我々が観察できる文化は、言語に収斂されたものが主であり、包容力・耐久性に富む言語の存在する場所こそが、地図上の黒色を呈する場所となる。人間が存在するところ言語も存在するわけだが、包容力・耐久性を持つ言語は限られる。世界でも稀有な包容力・耐久性を持つ言語がサンスクリットだ。とかく権威の象徴、ヒエラルキーの権化のように捉えられがちなサンスクリットだが、それが偏見であることは、今回の、とりわけ矢野報告にも明らかである。良心をもった知識者が、後世に伝えねばとサンスクリットに託した例が山と見受けられるのだ。

では中世期、ペルシア語がサンスクリットの負っていた役割を十全に引き継いだかといえ、否だったと思われる。リングアフランカにはなりえたが、政治的権勢による歪んだ構造のなかにあったことが、地方語文献の台頭という形でも察知される。さらに近代、ペルシア語のあとリングアフランカの地位をついだ英語については、現在進行形の問題ではあるが、はたしてサンスクリットの全き代役になりえているだろうか。縦横無尽にグローバル化する現代社会の中であって、インドにおける英語の役割はサンスクリットとは異なる要素がからんで、かれら固有の文化保持という視野には収まりそうにない。

まさに百花斉放、種々雑多な文化が様々な言語で表現される今日も、それらを下支えしてネットワークの強固な網糸の役割を演じているのがサンスクリットという言語である。それは、彼らが共有する宝箱でもあったのだ。

みずの よしふみ ●東京外国語大学大学院総合国際学研究院 (mizunoyo@tufs.ac.jp)